



『栄花物語』における有国像(二〇一六年度卒業論文
要旨集)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-12-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 遠藤, 彰悟 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007544

本研究では、『栄花物語』に六度登場する藤原有国の描かれ方の特徴を、史実や同僚藤原惟仲・妻橘徳子と比較しつつ探った。

まず、史実通り藤原道隆・道長らの父兼家の家司として惟仲と共に登場し、「左右の御まなこ」などと両者が称賛されている。

兼家死後、関白道隆に疎まれて除名され、惟仲は厚遇されたので、道兼・道長が同情し世人が道隆を非難した。道隆死後、有国は参議、さらに大宰大式に任命され、世人が人事を評価した。妻徳子は、下向の記事で「帝の御乳母の橘三位」と紹介され、夫の箔付けになっている。惟仲は、時に左大弁だった。

しかし史実では、道隆は有国を従三位に上げ就任したばかりの頭の弁を解任したが、積善寺供養の願文を作らせている。その後の官位剥奪は有国が事件に連座したためで、復位復官は道隆生前だった。道兼死後すぐに道長に申文を奉ったが任参議は六年も待つ。惟仲は「あはれな」有国を描くための人物とされるが、『栄花』は大幅な史実の書き換えを行って道隆批判と道長賛美のために対照的に描いているのであり、両者に軽重はない。

また、有国が大宰府で道隆の嫡男伊周を厚遇し、上洛の際に助言したのは、一見「人格者」としての有国が描かれているようにみえる。しかし彼の行動は、伊周に権帥となった恥を自覚させ、祖父成忠の死に目に会わせないことに繋がっていた。

有国が「絶賛」され、肯定的に描かれているとは言えない。